

## 第五十九回桐の花賞

作品 高橋 梨穂子

作品 松井 恵子

右に贈ることを決定した

令和四年五月

コスモス短歌会

### 高橋梨穂子の作品について

高橋梨穂子さんは一九九三年生まれ。二〇一九年六月の入会後わずか三年目の受賞である。高校生のときから歌は作っていて、さまざまなコンクールに応募、入選も果たしていたようだが、「コスモス」に入って、腰を据え本格的に学び出したことで力を発揮しはじめた。二〇二〇年、二〇二一年の〇先生賞にも意欲的に応募し、いずれも優秀作品に選ばれている。

正解はわからないまま くつきりとただくつきりと上げて描く眉不確かな日々でも確かなひとすくいびつたり味が決まる味噌汁

この傷は癒えてかならず森にするこの手は花に指先は鳥に

一児を育てる二十代の生活はさまざまな問題にぶつかることも多いと想像するが、これらの歌からは感情におほれない冷静さと、自己を見つめる確かなまなざしを感じる。表現も的確、明晰であり、口語短歌にありがちなリズムの緩みのないのが見事である。

抱き合えば互いにいびつな形して恋っていくつになっても不思議

きみを抱き昔ラッコがいたはずの水槽の前にしぼし竹む

前者は結婚し時を経た自分たち夫婦を冷静に客観視しながらも、

下句が清新でみずみずしい。後者は子どもを抱く自分とラッコの居なくなつた水槽を並べて、歳月の経過を巧みに表現している。どちらも輪郭のしっかりとした、かつ奥行きのある歌である。

ほかにもいろんな歌がある。

とても似合うバジャマを買ってもうずっとバジャマで生活したいこの冬

澄みきつた空に一番星ひかり標本木につぼみ生まれる

花火師のこまかく動かす指先がとじこめていくたくさんの夜

ふんわりとラップをかける ふんわり の力加減がわたしにもある

一首目のたのしいユーモア、二首目のゆたかなリリズム、どちらも歌の幅の広さを感じさせるし、三首目のものの見方は繊細だ。四首目が自己分析しているように「力加減」が良いのだろう。

実力ある二十代の新人が登場したことを喜ぶとともに、前途洋々たる高橋梨穂子さんには、着実にその才能を伸ばし続けていただきたいと思う。

《選考過程》

選者団に推薦を求め、高野・影山・桑原 狩  
野・宮里・小島・木畑・大松・田宮・津金・小山 福  
士・藤野・風間・田中・橋・水上比・鈴木・原賀 水  
上美・大野・松尾の各氏から回答があった。今

回の被推薦者は計8名であった。

一位3点、二位2点、三位1点として集計し  
た結果、高橋梨穂子42点、松井恵子40点、椎名  
恵理15点、中村恵14点、富永恵美子9点、清水  
佑太郎7点、梅田陽介3点、高野哲司2点とな

った。この数字をもとに二月十二日、編集部  
で検討し、得点の多い高橋梨穂子と松井恵子  
の受賞が決定した。

## 作 品 抄

正解はわからないまま くつきりとただくつきりと上げて描く眉

こわいことばかりが増えて目薬は（しみないタイプ）を選んでしまふ  
まばたきをするたび上下する睫毛 きみはうぐいすあんばんが好き

とても似合うパジャマを買ってもうずっとパジャマで生活したいこの冬  
口笛を誰のためでもなく吹けば真っ白になる冬のペランダ

冬の海見に来た鳥とわたしたちあなたは耳の形が綺麗

抱き合えば互いにいびつな形して恋っていくつになっても不思議  
会社から借りてるだけのアパートにまた思い出が増していく冬

かさぶたのはげたところにじむ血を薔薇の刺繡のハンカチで拭く  
後ろめたいことをしているときばかり笑って見える置物の猫

不確かな日々でも確かなひとすくいびつたり味が決まる味噌汁  
父の字は丸みをおびて染みだらけのレシピノートにある（ちくわ）の字

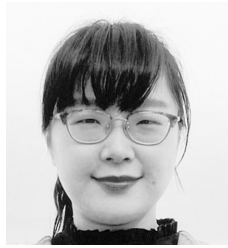
頭痛薬の効かない深夜ちくちくと毛布の毛羽立ちばかり気になる  
自動ドアひらけばまばゆいコンビニにこんなにくささんのひとりぼっち

澄みきった空に一番星ひかり標本木につぼみ生まれる  
センバツをラジオで聴けばカタカナで表現されるユニフォームの色

きみを抱き昔ラッコがいたはずの水槽の前にはばし佇む  
遠く見える山が青くてふるさとの海までつづく道にいるみたい

何回もひらいて読んでまたたみ仕舞う手紙がありました五月

斜め読みしている本の空白にひらく雪原 別れの場面



## 松井恵子の作品について

松井さんの歌には「疲れ」がしばしば登場する。

起きてゐることに価値ありお互ひが疲れ果てたる日の夕まぐれ

この人の疲れと吾のこの疲れブレンドされたこの部屋の疲れ

十歳はかしく真面目だから嗚呼疲れのだらうこの子夕風ゆふかぜ

直接「疲れ」という言葉は使わなくとも疲れた状態を詠んでいる

さび抜きの寿司にわさびをのせて食べるんだかすこし満たされない日  
いつの日か別れの日がくるさみしさのぬるくうずまぐまいる牛乳  
渦を巻き雪平鍋にひろがって熱はそんなに遠くへ行けず  
この傷は癒えてかならず森になるこの手は花に指先は鳥に  
適当にくくった髪の毛に夏の気配があおるかすめる  
水は水 両手のひらを碗にしてすくう金魚の真っ赤ないのち  
暗闇にきみと繋ぐ手あたたかくおぼけなんてないさおぼけなんてうそさ  
花火師のこまかく動かす指先がとじこめていくたくさんの夜  
ふんわりとラップをかける ふんわり<sup>の</sup>の力加減がわたしにもある  
発熱のこどもを膝に抱きながら風切るパラリンピアン見ている

## 感想

平凡でありふれた生活が、歌にすることで文学、芸術になってしまうことを不思議に、そして素敵だと思っています。

作歌を始めてから十年ちかく、どこにも属さずマイペースに詠んできたため、コスモスへの入会はわたしにとつて大きな決断でした。あれから二年半、まだたつたの二年半ではありますが、毎月ヒーヒー言いながらも投稿を続けることができています。わ

たしの歌のいいところを見つけてくださる選者の皆様、誌面でご一緒している皆様のおかげです。そんなわたしにとって今回の受賞は思いがけないことでしたが、同時に大きな励みになりました。これからも食らいついでいこうと身の引き締まる思いです。本当にありがとうございます。

## 略歴

一九九三年 新潟市生まれ

二〇一九年 コスモス短歌会入会

歌もあるので、実質的にはかなりの割合を占めるだろう。生きることは疲れることだとは、確かに一面の真理を突いている。ただ右に挙げた三首には際立った特長がある。自分の疲れだけにとどまらず、他者の疲れにもまた意を注いでいるのだ。一、二首目は夫らしき人物と疲れを共有しているが、二首目はなんと部屋までも疲れの仲間（？）に引き込んでいます。そこには自ずからユーモアが生れている。大人だけではない。子供も子供なりの疲れを抱え込んでいる。三首目は

大人の目にも痛々しく映る十歳の子に心を寄せているが、晩年に入った高齢者にふさわしいであろう「夕風」の比喩が痛切に響く。少子化が止まらない現代社会では、子供たちは否応なく大人の干渉に晒される。松井さんは自分もまたそうした一人なのだ歌う。

こんなにもやはらかな子の頭脳へと言葉を今日も差し入れてゐるあまりにも「やはらかな」頭脳に「差し入れ」られている「言葉」はさながらナイフかメスのような鋭利で硬質なイメージを与える。良かれと思つての行爲が、じつは相手を深く傷つけているかもしれないという恐れがここにはある。

興味深いことに「疲れ」をはじめ負のことがらを詠むに際して、

## 作品抄

起きてゐることに価値ありお互ひが疲れ果てたる日の夕まぐれ

よれよれの心で朝のお支度をしてゐる人の一人です(月)  
十歳はかしく真面目だから嗚呼疲れるだらうこの子ゆふなをき夕風

生活の中に抱つことおんぶあり腹と背中を温めてゐる

顎鬚に白いのちよこちよこ混じるから撫でたくなるこの人をこの頃  
歌詠みはやめてと吾子に言はれてまで歌を詠むこととても苦しい

暗い道、くすのきの脇、うづくまる心を伸ばししのばし歩いた

あなたからもらつた指輪りんりと車輪のやうに吾を転がす  
だめである全くもつて下手である息子の洗濯物の干しぶり

吾に似て洗濯物の干しぶりが美しくない息子とお茶を

いつか死ぬ店主が作るカツ丼をいつか死ぬわたしが食べてゐる

寢息には今のこの世と別の場所歩むあなたの息づかひあり

殺意だとするとあまりにあたたかで古新聞の束を積みゆく

松井さんが用いる言葉は、ふだん何気なく生活の中で発しているものに過ぎない。要するに口語、話し言葉である。だがそこには十分な配慮がなされている。二首目のそれぞれ三回も登場して来る「疲れ」と「この」の畳みかけ、三首目の上下を結びつけている「だから嗚呼」の働きにもそれは明らかである。シンメトリーな言葉の配置を生かしたという点では、次の一首は一段と印象深い。初めに触れた他者への注視は、ここでは自身へも向けられている。

いつか死ぬ店主が作るカツ丼をいつか死ぬわたしが食べてゐる  
幾度か候補に挙がったのちの今回の受賞を、作者は深く噛みしめているに違いない。



子どもらにバナナを配る朝のこと生あたたかく記憶しておく  
ムスカリムスカリかわいい花よ草刈りに草と思はれ刈られてしまふ  
こんなにもやはらかな子の頭脳へと言葉を今日も差し入れてゐる  
「スエヒサー」「マツイー」と声飛んでゐるザリガニのゐる用水路ばた  
幾日か体調不良のため休みその後みんなに励まされをり  
松井さん、ルッコラ採れたわよといふ声うしろから吾を励ます  
ゾーゾーと低音を出す換気扇 あちら側には群雲がある  
大仏を作つた心の不安定ものすごいものであつたのだらう  
飲みものを買つてくるとあなたが言つて玄関があなたを消してしまつた  
石を削るわたしの仕事の真似をする二歳さん、口で音も真似つづ  
食パンだ、とにかく食パンを買ふぞ、すぐ腹空かす人たちのため  
朝がくるたびに大きく沈み込む吾の断片どの断片か  
よれよれのときにハンカチたたむのはたのしい きつちりたたみゆくなり  
この人の疲れと吾のこの疲れブレンドされたこの部屋の疲れ  
言葉なく互ひの背中さすりゆく夜の淵にも落ちてくる蟬  
ハンバーグ担当不在の日が続きハンバーグ熱高まりてゆく  
たつちやんと夫のことを呼んでゐるいつまで呼ぶのだらうたつちやん

### 感想

里帰り出産のための帰省中に母に同行しコスモス  
長崎支部の歌会を見学した日によく覚えてます。  
言葉についてこんなにもまじめに意見を述べ合える場  
があるのかと驚きました。お茶菓子の美味しかった  
こと、みなさんの声のあたたかかったことも大事な  
思い出です。その後十三年程の間に夫も、それから  
あの日お腹にいた子どもも短歌に親しむようになりました。  
短歌の魅力はそこに集う人たちのあたたかさで

もあると感じています。

お会いしたこともお話ししたこともない先人の、  
また同人のみなさまのお力に感謝の思いを深くし、  
受賞のご挨拶とさせていただきます。

### 略歴

一九八二年 長崎県生まれ

二〇一一年 渡米中にコスモス短歌会入会

二〇一五年 COCONの会に参加

茨城県土浦市在住

## 第五十九回 桐の花賞選考資料抜粋

A・

### 1位 高橋梨穂子

子育ての日常に閉じこもらない思考の広さと深さが魅力。調べは伸びやかで明るく、幼子や夫にそそぐ眼差しもよい。

### 2位 中村 恵

病気の辛さを詠む歌から、意識的に脱皮しようとしているようだ。昨年も候補に挙がったが、歌柄に明るさと勁さが出てきた。

### 3位 清水佑太郎

多忙な若い教師の日常が活写された作品が多く、健康的で勢いがあり清々しい。生徒、妻、そして飼犬の歌も愛情深い。

B・

### 1位 高橋梨穂子

明確な因果関係があるわけではないものをイメージでつなぎ、詩として提示する作品が魅力的である。日常に密接した具体的に切り取りもよい。

### 2位 松井 恵子

生活の中にあふとさげす感覚を詩に仕上げる技法に優れている。子どもを題材にした作品に作者の姿が映像として伝わる。

### 3位 梅田 陽介

喜びの歌も悲しみの歌も事実と心情の描写に優れていて、感情過多にならないよう配慮されている。酒造りという仕事の歌も魅力的である。

C・

### 1位 高橋梨穂子

発想の根底には常に人間とは何か、私とは何かという問いかけが感じられる。身辺の見慣れた素材を大切に、自分なりの新鮮な発見をしている。

### 2位 中村 恵

身辺の人やものにそそがれるやさしさは、他の人や生き物や社会にもそそがれている。社会の深い闇に向き合っている。

## 推薦作品抄

### 高橋梨穂子\*

抱き合えば互いにいびつな形して恋っていくつになっても不思議  
発熱のこどもを膝に抱きながら風切るパラリンピアン見ている  
凹凸をちゃんととらえる指先で耳の裏まで塗る日焼け止め  
この傷は癒えてかならず森になるこの手は花に指先は鳥に  
適当にくくった髪の後れ毛に夏の気配があおくかすめる  
渦を巻き雪平鍋にひろがって熱はそんなに遠くへ行けず  
花火師のこまかく動かす指先がとじこめていくたくさんの夜  
手探りで砂のお山にトンネルを開通させるような子育て  
チェック欄にわたしを示す言葉なくすべてその他を選びたくなる  
きみが咽をコクンと鳴らして飲む乳に母牛がいて仔の牛がいる  
まばたきをするたび上下する睫毛 きみはうぐいすあんぱんが好き  
自動ドアひらけばまはゆいコンビニにこんなにくさんのひとりぼっち  
リュックから大きなセロリはみ出させ今日という日も主役はわたし  
そつと曲がる移動スノーバー雪すこしフロントガラスに残したままで  
体温はちゃんとありますセンサーの反応しない手のひらです

本年度桐の花賞の選考のもととなった推薦文と作品の一部を、ここに掲載する。推薦作品抄は、推薦者の挙げた作品の中から編集部が適宜抄出したが、推薦の多い作品を初めのほうに掲載している。

3位 富永恵美子  
都市生活者である一人の人間の哀感をさりげなく捉え表現する。

1位 高橋梨穂子

二十代で、会社員の夫とともに一歳児を育てている。日常を素材としつつ、余情を巧みに作品化する。

2位 清水佑太郎

三十代の英語教師の生活感が出ている。生徒との交流を詠んだ作品に人としてのすこやかさを感じた。妻と飼った犬を詠んだ作品も自然体でよかった。

3位 富永恵美子

韻律の上で工夫がみられる。機知に富み、素材に幅がある。眼が世界や時代に向けられている点があった。

1位 高橋梨穂子

日常の奥、もの事の奥を見ている人だ。その感性が詩を孕むのだろう。寂しさや不安も自己認識の糧として、良質で味わい深い作品を生む。

2位 松井 恵子

二児の子育て、研究職、家事の切り盛り。作者の歌に、強い臨場感があるのは、常に現場に

立っているからで、フル回転の生活の真の姿を伝える。

3位 清水佑太郎

言葉に熱量がある。大雨も犬も、そのパワーで詠いきるので景がダイナミックだ。シンプルな歌を詠える人は、高い能力を持つ人だろう。

1位 高橋梨穂子

日常生活に感じる喜び哀しみを素直に詠む。物の見方や感覚が独特で豊かだ。言葉選びも巧みで、急激に力を付けている。

2位 富永恵美子

明るくからっとした歌が多い印象だ。しかし軽い詠み口で、深く鋭いことを詠む。韻律がきれいで心地よい。

3位 松井 恵子

日常、特に家族を詠んだ歌に惹かれる。愛おしい時間の中にある切なさ、苦しみなどを独自の表現で表していて巧い。

1位 松井 恵子

主婦として母としてそして一人の女性としての心の葛藤を、時に自在な口語を駆使して詠む積極的な姿勢が頼もしい。

2位 高橋梨穂子

若さゆえの孤独や言いようの

春過ぎて紫陽花わさわさ咲く頃もわたしはちゃんとわたしだろうか  
空色のゼムクリップで留められた紙飛行機になれない書類

松井 恵子

だめである全くもつて下手である息子の洗濯物の干しぶり

この人の疲れと吾のこの疲れブレンドされたこの部屋の疲れ  
暗い道、くすのきの脇、うづくまる心を伸ばししが歩いた  
いつか死ぬ店主が作るカツ丼をいつか死ぬわたしが食べてゐる

この人のとなりで夢を見る不思議 甘夏の木に甘夏太る

わたしたち家族四人の物語に今一本の花瓶が欲しい

飲みものを買ってくるあなたと言つて玄関があなたを消してしまつた  
よれよれの心で朝のお仕度をしてゐる人の一人です(月)

あなたからもらつた指輪りんりと車輪のやうに吾を転がす  
雪の降る前の重たい暗い雲に圧されてのびてゐるシロマダラ

子どもらが子どもであるそのうちに暇さへあれば抱きしめておく  
ストローで水をつつく間とかそんなときに思ひ出してほしいの

紙コップ捨てるさびしさあなたとの暮らしの中にある不確かさ  
よれよれのときにハンカチたたむのはたのしい きつちりたたみゆくなり

たつちゃんとうちの夫のことを呼んでゐるいつまで呼ぶのだらうたつちゃん  
保育所に行くとうちの元気になる息子、だれど行きたくないといふ朝

椎名恵理\*

ヌードデッサンされる男が身につけるただ一つだけ トラガスのピアス  
その男、両太ももの内側に蓮華のようなタトゥーはありぬ

九日を陳麻飯店の油淋鶏食べ続けられる我が才能は  
満員の京王新線十七センチ開いた窓から夏流れ込む

一人分の食材買うのに慣れ母は一人の夏をそつとはじめる

ない様々な思いを率直に、しかし十分に詩的に昇華できる才能には、大きな魅力がある。

3位 中村 恵

地方での生活や家族との日常に向き合う中から、哀しみに裏打ちされた歌を生み出している。

1位 松井 恵子

夫とのまた、子との間で揺れる心。ある時は幸福に、ある時は不安に。家庭という器の中で思考しながら生きる個性ある一女性の姿にひかれた。

2位 高野 哲司

ひたすさらに野の草木を詠い続ける姿勢には、いつか消え去ってしまうのではという危機感とそうはさせじという強い愛情を感じた。

3位 高橋梨穂子

日常のさりげない出来事から歌を紡いでゆくすべを知っている。

1位 松井 恵子

有能な女性の鬱屈が作品のテーマ。幸せと言われるような環境にあってもどこか満たされない不全感はこの時代を生きる女性の共感を呼ぶ。

2位 高橋梨穂子

若々しく大胆な詠風に特徴がある。作中の自身を印象的に描写する力量があり、一首一首にドラマがあって読ませる。

3位 中村 恵

作品に実生活を重ねて鑑賞すべきではないが、作者の置かれている境遇はかなり厳しいようだ。歌を詠むことで自らを支えているのであろう。

1位 松井 恵子

子育て世代の忙しさ、疲れを詠みながらも、子ども達の成長の歌は楽しく、夫を詠む歌が日溜りのように温かく切ない。

2位 高橋梨穂子

妊娠、出産を丁寧な詩的に昇華させてきた作者。日常の細事を詠んでも独自の視点と心情への落とし込みで力量を感じる。

3位 中村 恵

病を抱えながらも、周辺への眼差しは慈愛に満ちて、尚且つユーモアを忘れない詠みに視野の広さを感じる。

1位 松井 恵子

職を持ち、二人子の母として生きる日々を陰影深く詠う。夫を詠んだ歌には、既成観念で捉えられない独自の感覚が光る。

二ヶ月の休講となりとつぜんに一層に学びたくなり手話を揚げたてのコロッケを待つ列ながく先頭は腹なめている猫お椀ほど大きいメンチ四つ買い 四つを抱いて遊歩道ゆく冷凍庫の扉を足で閉める人だけにはなりたくなかったはずが干からびたミミズばりばり食い終えて家犬ほめられたき顔をする八年を会わぬ人から歌集きて三首目で知る妻逝きしことぶしゆぶしゆと洩水ちらしてくしゃみする海をはじめてなめた仔犬が

中村 恵\*

チクワブとチクワは別と知ってから疑っているナスとナスピを外でならずこし泣いてもかまわないかまわれないから泣かないでいるベーチェット病、躁鬱病のわたくしの押す車椅子に乗る大義父子と紙を秤にかける馬鹿なわれ墓の草引く卵巣は空<sup>から</sup>あおい紙一葉くるい紙一葉散りゆくそれで子が買えるならパルメザンチーズ、シンクの磨きあげ、山陰の冬のはじまりが好き地震恐いウイルス怖いネットコワイ干し芋食べておなかがかわい手足腰ぐーんとのはし若返るお椀のなかでふえるわかめはこの夏の終わりをしめす雨のつぶ纏ったローズマリーを摘みぬ玄関の手すりのうえの燕の巣ふたつ今年もつかわれている

富永恵美子\*

病室のリスナーからのリクエスト日暮れのキッチンやさしく包むうっかりにすっかりがっかりでも明日はしっかりやるぞきっかり零時開けたまま或いは閉める人もいて梅雨の車窓はどれも正しいドイツでは男性名詞という豆腐 絹ごしみたいな性格が好き見開きの絵本のページの青い空のぞいてくぐってさわって抱いて君とわれやっぱり全く違う人 似合うマスクが全く違う



2位 中村 恵

義父の怪我や父の病、自分の病や不妊治療を諦めねばならぬ状況をも目をそらすに詠う。夫を詠む温かさに救われる。

3位 高橋梨穂子

子育て中でありながら、題材が多岐に渡り、自分や社会を見つめる眼差しに個性を感じる。

1位 椎名 恵理

歌の骨格が大きく、幅が広くなっている。努力の跡が見える。職場や家族からも積極的に題材を取り、表現の明るさの中に力勁さと仄暗さが滲み出ている。

2位 松井 恵子

多忙そうな日々の中の暖かな家族像。すなわち作者の本質的な暖かさだろう。個々の題材はユニークだが、そこに普遍的な人間像が透けるのがいい。

3位 高橋梨穂子

がんばる子育ての日々。その現実を描きながらもふと別世界にも飛ぶ。勢いのある表現が作者自身に引き付けられているのがいい。もつと自在に。

1位 中村 恵

具体的に即した少しのイメージ化がいい。一首の急所を端的に

掴み、リフレインの効果を生かす力がある。自然に対する感受性が豊かである。

2位 高橋梨穂子

若干の飛躍を携えて歌を生むのが魅力だ。具体を根底に置き作歌するのがよい。自らの行動行為を楽しみ、それらを題材とする余裕がある。

3位 清水佑太郎

ユーモアのセンスがあり歌が愉快で楽しい。一首の表記の選択に注意が払われている。人と人との関係性を大事にして丁寧な歌を紡ぐ。

1位 雷永恵美子

東京という激戦区で特選9回はすばらしい。世界や社会へ目を向けた作品はとて興味深い。大いに期待したい。

2位 高橋梨穂子

日常生活の細やかなできごとを自分自身の言葉で、優れた歌に詠んでいる。繊細な感覚が光る歌が多い。

3位 中村 恵

作者と、作者の家族を詠んだ歌が印象的である。暗くなりがちな題材を客観的に詠んでいてなおさら読者の胸を打つ。

蟬の翅ではなく翅だけの蟬と呼びおり秋に残るひとひら

エコバッグのちようと安全座する重さじつくり選んだ台湾パイ

清水佑太郎\*

タブレットに犬が吠えたと通知来て映像でみる犬の留守番

熊蟬がみんな何度でも「シネシネ」と鳴く林抜け夏に飛びこむ

コロナ禍で濃厚接触できなくて受かった生徒とエア・グータツチ

大雨で冠水したるグラウンド生きてつかない俺の自転車

古椅子に飼い犬のせて空を見る人道雲は内から増える

納車の日カーディーラーからその足で葛西臨海公園へいく

自動車の運転席はいつも妻わたしと犬は仲良く後ろ

免許証の出版は更新だから抽斗の中虚ろなゴールド

梅田陽介

妻の胎おほきくなりて亡き母の待ち焦がれるし子が動きをり

ねむりつつ母乳を吐ける赤子よりなどは匂ふ海の魚と鉄

酒蔵の裏手で諍ふ恋猫のいやはや酒でも飲みたい陽気

コロナ禍中立ち会ひならぬ出産の無事祈りつつ車中にて待つ

髪くろく顔丸まるとあとけなき産まれたばかりの吾子の愛しさ

高野哲司

住吉神社の参詣道に鎮座せり絶滅危惧種ハマホラシノブ

「愛情の再創造」とふ肥料あげ我は育てるサワオトギリを

低水敷の鞆の熟れゆくツルマメはホームドラマの温かさ持つ

ハマアオスゲのユマニチユードを語り合ふ美容師と吾の午後のひととき

薄皮のクレープ生地をつくること蓄のびゆくチョウセンアサガオ